イランの核問題もまた、日本に対米関係以上の問題を投げかけている。なぜならイランの核の脅威は、イスラエルと米国にとってだけの脅威ではないからである。2007年春に安倍首相（当時）がサウジアラビア、UAE、カタル、クウェート、エジプトを歴訪した際、全ての国との共同声明において、北朝鮮問題に言及すると同時に、前者3ヶ国との共同声明ではイランの核問題に直接言及している。共同声明には、イラン核問題の外交的な解決策の重要性を強調すると同時に、イランに対し安保理決議遵守とIAEAへの協力を訴える文言が盛り込まれた。イランの核問題は北朝鮮問題と無関係ではなく、この共同声明は、湾岸アラブ諸国と日本が共通の懸念に直面していることを示している[10)]。WMD問題から地球環境問題まで、グローバル化する安全保障問題は国単位、地域単位での対処をますます困難にしている。日本の対中東安全保障政策もまた、親米か、親中東か、という枠だけでは完結しなくなっている時代を迎えているのではないだろうか。

（吉岡　明子　（財）日本エネルギー経済研究所 中東研究センター研究員）

外川昌彦『聖者たちの国へ――ベンガルの宗教文化誌』日本放送出版協会、2008年、268頁

本書は、著者が1998年から2007年にかけてバングラデシュとインド西ベンガル州で行ったフィールドワークに基づき、聖者信仰をめぐる人びとの宗教世界の諸相を考察したものである。文化人類学を専門とする著者は、これまで西ベンガル州の村落における女神祭祀やブロト儀礼、バングラデシュにおけるスーフィー教団の社会組織、聖者廟・聖者信仰など、ベンガル地方の多様な宗教事象を幅広く研究してきた。本書では、過去10年ほどのあいだに、著者が精力的に発表してきた聖者信仰にかんする個々の論考が、「スピリチュアルな世界」という観点から一冊の宗教文化誌として編みなおされている。

南アジアでは、これまでヒンドゥー・ムスリム間のコミュナルな対立や、激化する宗教ナショナリズムの動向がしばしば注目を集めてきた。本書に収められている事例のほとんどがバングラデシュでの調査に基づくものであるのにもかかわらず、副題に「ベンガル」と銘打ってあるように、「インド」／「バングラデシュ」、「ヒンドゥー」／「イスラーム」という既存の境界や境界をつくりだす「分ける視点」への問いかけが、本書を一貫する著者の問題意識となっている。聖典に基づく厳格な教義や複雑な国際政治という観点から語られることの多い「イスラーム」の国と一般的に認識されるバングラデシュ社会を、「宗教」の差異が意識される以前、無意識の深層世界への視座から分析し、生活の場における信仰と宗教実践のありようを捉えなおそうというのが、本書のユニークな試みである。

本書は7章からで構成されており、それぞれがベンガルの宗教世界の断片を示唆するかたちで、異なる物語が語られる。以下が本書の構成である。

第一章　スピリチュアルな夢――ある女性修行者の物語
第二章　三蔵法師の訪れたバングラデシュ
第三章　聖者廟をめぐる苦悩――ヒンドゥー教とイスラームのはざまで

10）Akiko Yoshioka. “Japanese Prime Minister’s Visit to the Middle East to Build a Multilayered Relationship.” *Asia Research Bulletin* 3, Gulf Research Center. November 2007.

第四章　辺境のハオル地の村で――マドブのさかさまの世界
第五章　国境を越える聖者――ダッカの街の風物詩
第六章　世界遺産としての聖者廟――バゲルハートのカーン・ジャハン・アリ廟
第七章　聖者たちの世界――タゴールの神秘体験
あとがき

まず、各章の概要をみていこう。第一章で、著者はまず、「南アジアの人びとの暮らしに織りなされる宗教世界の広がり」を明らかにするために、「ヒンドゥー」「イスラーム」という「宗教」や、「宗教」をめぐる対立にばかり注目しがちな一般的見解に疑問を呈したうえで、聖者廟をとりまく聖者信仰の世界を、人びとの無意識の深層を垣間見せる「スピリチュアルな世界」として捉えようとする。具体的には、ラロン・シャハの聖者廟で修行する女性修行者ジャナハラの語りに焦点を当て、個人の信仰実践や解釈にあらわれるベンガルの多様で混交的な「スピリチュアルな世界」が描き出される。さまざまな宗教的要素が混交する霊的世界を、個別の宗教の本質的な差異を前提とする「シンクレティズム」として説明するだけでは、ジャナハラの修業体験を十分に捉えきることができない。それよりもむしろ、霊的世界への洞察を通して、「ヒンドゥー」「イスラーム」が厳然と区別される二元論的世界を乗り越えてゆく可能性に著者は注目し、修行者の経験に根ざしたひとつの宗教世界を見出していくことによって、その宗教実践のより内在的な理解へ向かおうとする。

第二章では、バングラデシュを中心に、仏教時代からヒンドゥー教時代、イスラーム化の浸透するムガル帝国時代・植民地時代を経て現在にいたるまでの、ベンガルの宗教文化にかんする歴史的過程が述べられる。植民地時代の分割統治策や、第二次大戦後の印パ分離独立によって、ヒンドゥー教徒とムスリムのあいだで「宗教」対立が深刻化するようになり、その後バングラデシュとして独立以降も、「宗教」「国家」をめぐる分断状況とコミュナルな対立は、南アジア世界に依然として濃い影を落としている。

そうしたコミュナリズム現象について、モノモホン廟をめぐる聖者信仰を事例として、シンクレティズム論再考という視点から考察されたのが、第三章である。ヒンドゥー教徒にもムスリムにも信仰されるモノモホン廟では、儀礼実践や聖誕祭において、ヒンドゥー的要素とイスラーム的要素が混在する多元的な宗教実践がみられるが、これは「シンクレティズム」という状況を説明する事例として解釈できる。だが一方で、知識人によるイスラーム教育の普及を背景として、現在の聖者廟は、「ヒンドゥー」か「イスラーム」かという二者択一的な解釈の中に組み込まれつつあると、著者は指摘する。従来、インドやバングラデシュでは、「異質な宗教の共存」や、他宗教への「寛容性」など、シンクレティズムの伝統が、独立運動やナショナリズムなどの政治的局面で強調されてきたが、宗教的「寛容性」は、異なる宗教への不干渉という意味で、実際にはしばしば他者への「無関心」の態度とも結びついている。モノモホン廟で起こっている論争を、宗教の本質的な差異を意識した人びとによる、「どっちつかず」の態度への批判と捉える著者の見解には、当事者の主張するシンクレティズムの言説とコミュナルな対立に共通する、分ける視点への疑義が示されている。第四章では、バングラデシュの中でも特に開発の遅れた貧困地域とされるネットロコナ地方の村落にある聖者廟をめぐる日常的風景が、著者の村落滞在中の経験を交えて描き出される。伝統的な民俗音楽・宗教歌として知られるバウルの歌が、雨季の農閑期になると聖者廟に集う村人の楽しみのひとつとして、あるいは聖者廟の祭礼の場で歌われる様子からは、歌が象徴する融合的な霊的世界が人びとの生活に深く浸透していることがわかる。

第五章・第六章では、聖者廟をめぐる地域住民や宗教者による宗教的ネットワークを中心に記述される。第五章では、バングラデシュのダッカとインドのアジメールでともに信仰される聖者モイヌッディン（通称カジャ・ババ）が採り上げられ、国境を越える信仰と、信者と聖地との結びつきが、命日祭での祭壇建設をめぐる地域住民の共同性や、そこで繰り広げられるさまざまな儀式や歌の催しの風景とともに描かれる。第六章では、世界遺産でありバングラデシュ最大の観光地の一つでもあるカーン・ジャハン・アリ廟をめぐる管理体制や管理権の争い、及びそれらの現代的変容が考察される。フォキル一族という大規模な親族集団が、これまで代々運営・管理を行ってきたカーン・ジャハン廟の事例は、「ムスリム社会における、家族的経営や共同管理の新たな可能性を示す」ものであるとともに、著者はまた、個人を団結させ、地域社会の統合という形で大きな役割を発揮するという意味で、ベンガル社会における聖者や聖者廟が備えている求心力の大きさにも着目している。

これまで主に現地の事例から現在の聖者信仰の諸相が描かれてきたのに対し、第七章では、ベンガルを中心とした南アジアの口頭伝承や文学作品に現れる認識世界への眼差しを通して再び「スピリチュアルな世界」を描き出そうとする。具体的には、第四章でも採り上げたバウルの歌に加え、聖者伝などのテクストを対象に、聖者が体現する修行の階梯を考察することで、「意識の深層の体験がもたらす、日常の背後に隠されたリアリティーの変容」を明らかにしようとする。従来の人類学研究では、エリート文化（大伝統）／民衆文化（小伝統）という二つの図式的対比からイスラーム文化のあり方が説明されてきたが、そうした二分法では、知識人も一般民衆も包含する多様な人びとに担われた宗教文化の展開を十分に描き出すことはできないとして、著者はそれらの相互補完性に着目する。修行者が体験する認識世界において、外面の道と内面の道という二つの立場は対立する両極の視点ではなく、認識世界に構成される多層的なリアリティーのそれぞれの局面として語られる。また、文字文化に表象される意識の階梯と修行者が語る内面的な修行の階梯はさまざまな類似点を有し、修行者が体得するヴィジョンは相互に翻訳可能なものとして描かれる。そうした内面的な修行の階梯がいかに伝承され実践されてきたかを、修行者の語りや彼らに歌われる宗教歌に見出すとともに、彼らの修行実践と信仰の解釈のなかにみられる二つの立場の相互補完性を著者は指摘する。

以上で述べてきた本書の概要を踏まえ、日常生活の場で織り成されるベンガルの人びとの宗教世界を明らかにするという著者の意図が十分に達成されていることをまずは評価したい。学術的な観点からの聖者信仰については十分に論じることができなかったとあとがきに記されているが、むしろ学術的な議論に回収されないやわらかな記述によって、聖者廟という場所からたちあらわれる宗教世界の諸相が具体的に描かれているため、イスラームや聖者信仰を専門としない人も入り込みやすい宗教文化誌となっている。著者の記述を通して明らかとなったことは、一方では、聖者廟・聖者信仰をめぐる個々の事例の固有性と多様性であり、他方では、それらに共通して広がりをみせる近代化・イスラーム化と連動するコミュナリズム現象と、差異化される以前の、人びとの無意識の領域で共有される霊的世界という対極的な宗教現象が、具体的な生活の場においてともに見出されるということである。このように、聖者廟・聖者廟をめぐる多様な宗教現象を対象として、現地の事例と民族誌記述という手法を用い、多角的な視点からの示唆を包含してひとつに文化誌にするという試みは、少なくとも日本におけるベンガル研究では初めてである。たしかに、南アジアの聖者廟をめぐるシンクレティズム／コミュナリズム現象について、近年の人類学では、人びとの生活現

場における信仰のありようを追究し、分ける視点を批判した関根康正の研究［2000］や、聖者の死後に聖者廟を継承する弟子・信者のあいだに生じたヒンドゥー／ムスリム間のアイデンティティ・ポリティクスを論じた三尾稔の一連の研究などがあったが［1997; 2000］、外川氏の試みた霊的世界をも視野に入れた総合的研究は、これまでにないユニークなものといえよう。

だが他方で、霊的世界の扱い方にかんして、本書は若干の問題を抱えているようにおもわれる。ひとつには、「スピリチュアルな世界」をどのような意味で用いるか、あるいは、著者自身が霊的世界をどのように捉えようとしているのかということが、明確にされていないことにある。

特に、女性修行者ジャナハラの語りの記述には、視点のユニークさと問題点の両面があらわれているといえる（第一章）。ジャナハラの語りには、家を離れ修行の旅に出る契機となった、霊的世界からの呼びかけや、照明体験、天界飛行（ミウラージュ）の夢体験など、さまざまな不思議な出来事の経験が生き生きと描かれていて、それだけで非常に興味深い。このような霊的体験は、それがクルアーンやハディースなど聖典に描かれた普遍的な物語と呼応しあうことで、単なる個人的な経験を超えて、多くの人びとが共有する「無意識の共同体」ともいえる神話的世界の一部として、人びとに受け止められると著者はいう。そのほか、過去生や修行の伴侶にかんするジャナハラの語り、あるいは、ヒンドゥー教徒である伴侶とともに各地の聖者廟をめぐり歩く、ヒンドゥーの修行もイスラームの修行も行うなどの宗教実践にみられるような、ヒンドゥーやイスラームに加え、サハジャ乗などの仏教的要素、スーフィズム、バクティ信仰などが融合する宗教的世界を、著者は「スピリチュアルな世界」として提示する。

そこでは、読者が想像しやすいように、柳田國男の「口寄せ」の話や、シンクロニシティ、ソウル・メイトといった、ベンガルを超えて普遍的な精神世界を連想させるさまざまなイメージや観念を引用するなど、記述に工夫がみられる。しかし、頻発する「神秘的」「不思議な」という形容からはどうしても、何か日常生活の場から乖離した、本質的な霊的世界がそこにあるかのような印象を受けてしまう。文学作品などに描かれる聖者が体現する修行の階梯において、「日常の背後に隠されたリアリティー」を見出そうとする手法にも（第七章）、同様の問題を指摘できる。生活の場に根ざす宗教的世界を、表層／深層、意識／無意識と分けて、後者に「隠された」真理のようなものを見出そうとする立場は、著者が本書で一貫して批判する、ある「宗教」を本質的で一義的なものとして他の「宗教」から分ける視点と、同様の視座に絡め取られてしまう危険があるのではないか。

あるいは、著者が、霊的世界という視点を、記述・説明するための概念として、あえて日常と分けるかたちで用いていると解釈してみよう。分ける視点への批判が最も端的にあらわれているのは、モノモホン廟における宗教的シンクレティズム／コミュナリズムにかんする考察である（第三章）。そこでは、個別の宗教の差異を超越することを志向し、宗教の普遍性を謳うモノモホンの歌や、聖者廟をめぐる宗教実践において、ヒンドゥーにもイスラームにも共有される霊的世界のありようが提示されている。他方、そうしたシンクレティズム現象を南アジアにおける伝統とみなす政治的言説と、コミュナルな対立意識は、どちらも「宗教」を分ける視点に由来し、互いに無関係ではない現象であると著者は批判する。このことは、著者のほかの論考でよりはっきりと説明されている。「言い換えると、『近代』にしろ『前近代』にしろ、宗教的混交の状況を意識せずに実践する人々と、その状況に意識的であろうとする人々との間には、類似の文化を共有しながらも、明らかに異なる志向性が存在するのである」［外川 2006: 38］と述べたうえで、シンクレティズム／コミュナリズムの背景にはイスラーム化をめぐる政治的意図が作用した「宗教性の自覚」があると、著者は捉えている。無意識の領域から「宗教」対立を捉えなおそうとする著者の試みには注目したい。しかし、

本書で想定される深層（霊的）世界／表層（日常）世界という分け方には、静態的で本質的な霊的世界という前提が含まれているようにおもわれる。というのは、イスラーム化や宗教ナショナリズムの活発化という表層世界の変容に伴って、霊的世界が消滅してしまうことへの危惧が、本書の随所で示されているが、そこには霊的世界に対する著者の価値判断が挿入されているように見受けられるからである。そこで生活する人びとにとって、霊的世界は消えゆくものではなく、表層の日常世界の動態と不可分に変容していくのではないかという疑問を覚えるとともに、霊的世界への価値判断を前提として深層と表層の世界を分けるというやり方は、生活者の暮らしのなかから宗教世界を描き出そうとする著者の立場とも矛盾するものと思われる。

霊的世界を扱う困難さには、他にも、どのようにしてそれを把握し、記述するかという問題があるだろう。著者は、ジャナハラの語りに加え、歌や文学、聖者伝などの記述に依拠して霊的世界を抽出しているが、それらがどのように折り重なってベンガルの人びとに共有される宗教世界の地層を築いているのかが、立体的には見えてこなかった。本書で提示された多様な聖者廟・聖者信仰の事例をベンガルの宗教世界のなかに位置づけるには、霊的世界という視座に加えて、それらをつなぐ何らかの媒介がおそらく必要だからであろう。随所で触れられる遍歴遊行者たちの、聖者廟をつなぐ宗教的ネットワークのありようを具体的に解明することは、そのための有効な手段となりうる。また、霊的世界は、人により異なったしかたで経験されるという側面も考慮に入れる必要があろう。例えば、象徴的な詩句に満ちたバウルの歌も、修行者として経験を積むことではじめて、一般の人にはわからないような歌の隠された意味が理解できるようになるというように（第四章）、個人が位置づけられる社会的コンテクストや人生の段階において、経験される霊的世界はさまざまに変容するだろう。そのような、不可視で多様な経験的世界である霊的世界を、どこまで地域の人びとが共有する宗教世界とみなすことができるのか。

本書に通底する霊的世界に対する著者の認識と視角がもっと明示的に説明されていれば、以上挙げてきた問題を著者の意図に沿って解釈することもできたであろうし、本書の内容への読者の理解がより深まったのではないかとおもわれる。また、霊的世界という視点を活かしつつ、本書の成果を今後発展させるには、霊的世界そのもののあり方を検証する必要があろう。しかしながら、さまざまな難題を抱えつつも、霊的世界をフィールドワークしようとする著者の意欲的な試み自体には共感と賛意を示したい。

最後に、本書の成果を受けて、「聖者」を「宗教」の枠組みを超えて比較可能な概念であると措定したうえで、南アジアにおける聖者・修行者研究に対する本書の意義を検討したい。評者の関心からいえば、南アジア、特にインド・ヒンドゥー世界の聖者・修行者研究に著しい影響を与えてきたのが、60年代にルイ・デュモンによって提示された、家住者と現世放棄者との関係性を、世俗内人間／世俗外個人という理念型で捉えようとする理論［デュモン 2001］であった 。それに対し、著者は別の論考で、デュモンが「現世放棄者」をもっぱら個人の解脱を追求するヒンドゥー修行者や聖者として理解する一方で、「理論的にも歴史的実態においても、ベンガル地方などではむしろ、ヒンドゥー世界の外部に存在していたイスラーム性が、常にその対極として意識されていたことは無視のできない問題である」[外川 2005: 66] と批判する。本稿でみてきたように、本書は、特定の「宗教」に閉じられていない霊的世界が、宗教の普遍性を体現する聖者たちや、彼らを信仰し、同様の道を追い求める修行者・信者たちによって、南アジアの宗教世界の一部として人びとの生活の場で培われてきたことを明らかにした。デュモン以降、現世放棄者を研究する者は、賛同するにせよ批判するにせよデュモンの理論に依拠するかたちをとり、もっぱら「ヒンドゥー」の枠組みにおいて

宗教修行者たちを捉えてきたが、ヒンドゥー性やイスラーム性、またはその他の宗教的要素の混交する霊的世界という本書の視座は、研究者の参照枠それ自体への鋭い批判と再検討の必要を喚起するものであろう。

本書は、ベンガルの宗教世界への入り口を提供するとともに、その深い底脈へ通じるための、さまざまな示唆や問いを投げかける。既存の閉じられた「宗教」概念を問い直し、聖者廟・聖者信仰という多様な宗教世界のありようを通して、そこに反映される現実の矛盾のはざまで葛藤する人びとの「苦悩」と向き合おうとする著者の姿勢に、評者は深い共感を覚えるとともに、それらをいかにリアリティーとして表しうるのかという、民族誌（あるいは著者が別著で強調する「民俗誌」）的記述の問題を考えざるをえない。他者の苦悩を、書く者が自らの置かれる苦悩の場に照らし合わせながら、相互に了解しうるものとして、描き出すことができるのだろうか。霊的世界とそこに映し出されるひとりひとりの苦悩の民族誌的（民俗誌的）記述という問題がどのように展開されるのか、評者自身の自覚と抱負も併せつつ、外川氏の今後の研究に期待したい。

参照文献

関根康正 2000「生活世界の信仰から見直すコミュナリズム現象――チェンナイ（マドラス）市における 1994 ～ 98 年の参与観察と聞き書きを中心に」『東洋文化』80, pp.1–76.

デュモン, ルイ 2001『ホモ･ヒエラルキクス――カースト体系とその意味』田中雅一･渡辺公三（訳）みすず書房 .

外川昌彦 2003『ヒンドゥー女神と村落社会――インド・ベンガル地方の宗教民俗誌』風響社 .

――― 2005「バングラデシュのマイズバンダル教団における血縁的系譜と霊的系譜」赤堀雅幸・東長靖・堀川徹（編）『イスラームの神秘主義と聖者信仰』東京大学出版会 , pp.63–136.

――― 2006「シンクレティズム論再考――南アジアの聖者信仰におけるヒンドゥー教とイスラーム」『宗教研究』80(1), pp.25–43.

三尾稔 2000「ラージャスターンの一スーフィー聖者廟におけるコミュナリズム」『東洋文化』80, pp.139–89.

――― 1997「ヒンドゥー・ムスリムアイデンティティーをめぐるミクロポリティクス――インド・ラージャスターン州における聖者廟管理権扮装の事例分析」『東洋英和女学院大学　人文・社会科学論集』12, pp.1–47.

（濱谷真理子　京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科）

‘Āṭif ‘Adlī al-‘Abd. 2008. *al-Idhā‘a wa al-Tilīfizyūn fī Miṣr: al-Māḍī wa al-Ḥāḍir wa al-Āfāq al-Mustaqbalīya*. al-Qāhira: Dār al-Fikr al-‘Arabī. 272 pp.

エジプトは 19 世紀のナフダ（文芸復興）以来、アラブ文化の中心地である。とりわけ 20 世紀にはいると、映画、ラジオなど通して、アラブ諸国への文化の積極的な輸出地となった。非識字率が高く、口頭でのコミュニケーションが重んじる伝統を有するアラブ諸国では、エジプトで生産された質の高い映画やラジオ放送が、人びとのかけがえのない娯楽として機能してきた。

こうした文化産業は、つとに指摘されてきたように、特定の理念･利害と無関係ではありえない。